

報告

双方向型授業の取り組みにおける成果と課題 —「橋本メソッド」の実践を通して—

吉田 博 金西計英
徳島大学大学開放実践センター

要約：近年、我が国の大学の授業において、双方向型授業、学生参加型授業、協同学習、問題解決型学習などのアクティブ・ラーニングと呼ばれる学習形態が注目を集めるようになってきた。本稿では、大人数双方向型授業「橋本メソッド」という授業方法を参考にして、双方向型授業を実践した取り組みにおいて、授業を受講した学生の声から伺える本取り組みの成果と今後の課題について報告する。本報告で取り上げる授業は、徳島大学で2010年度後期に実施された共通教育科目「情報メディアと教育」で、134名の学生が受講する大人数授業である。本取り組みでは、授業を受講している学生に対し、この授業に対する学生自身の取り組み方、授業外学習、授業の改善点に関するアンケートを実施した。さらに、授業の中で本取り組みの改善点について議論する時間を設けた。これらのデータを分析することで、授業外学習の促進、あるいは学生の積極性、プレゼンテーション力の向上に一定の効果があることがわかった。一方で、遅刻・欠席者の数が多いといった改善点もいくつか明らかになった。

(キーワード：双方向型授業, 学生主体の授業, 授業外学習, 橋本メソッド)

Achievements and Problems of Interactive teaching approach - Throughout practice of Hashimoto Method -

Hiroshi YOSHIDA Kazuhide KANENISHI
Center for University Extension, The University of Tokushima

(Keywords: Interactive teaching, student-centered teaching, learning time outside the classroom, Hashimoto Method)

1. はじめに

今年、大学教員の中で注目を集めた番組がある。それは、NHK教育テレビで放送された「ハーバード白熱教室」^{※1}である。この番組は、ハーバード大学の授業の中で、履修学生の数が最高記録を更新した、マイケル・サンデル教授の「Justice (正義)」を放送したものである。この授業は、絶対的な答えがない問題について、サンデル教授が学生に、「君ならどうするか？何が正しい行いなのか？その理由は？」と質問を投げかけながら、学生の活発な議論を引き出し、その判断の倫理的正当性を問うていくという内容である。筆者は、徳島大学内において、この番組に関する話題をよく耳にするようになった。それは、このような討論型、あるいは双方向型の授業を自身の授業の中で実践しようと考えている、もうすでに実践しているという教員による日常会話である。NHKでは、11月より「白熱教室 JAPAN」^{※2}の放送をスタートさせ、日本の各大学で繰り広げられて

いる、ハーバード大学のような教員と学生による自由闊達な議論の様子が放送されている。全国的な調査においても、溝上(2007)によると、アクティブ・ラーニングは、専門分野を問わず広く実施されていることが明らかになっている¹⁾。ここでのアクティブ・ラーニングとは、「学生参加型授業」「協調・協同学習」「課題解決・探求学習」「能動的学習」「PBL (Problem/Project Based Learning)」などのことである。また、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」では、学習の動機付けを図りつつ、双方向型の学習を展開するため、講義そのものを魅力あるものにするとともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れることを、大学に期待する取り組みとして挙げている²⁾。これらの背景か

※1 ハーバード白熱教室

<http://www.nhk.or.jp/harvard/> (2010. 12. 31)

※2 白熱教室 JAPAN

<http://www.nhk.or.jp/hakunetsu/> (2010. 12. 31)

ら、授業の中でこのような双方向型授業を導入する教員は、今後さらに増加していくのではないかと考えられる。本稿では、このような双方向型授業を実践した取り組みにおいて、授業を受講した学生の声から伺える本取り組みの成果と今後の課題について報告する。

2. 大人数双方向型授業橋本メソッドとは

双方向型授業の取り組みは、上述した溝上(2007)の研究からも、さまざまな方法で実施されていることがわかる。その中でも本報告で取り上げる授業は、大人数双方向型授業「橋本メソッド」という授業方法を参考にして、双方向型授業を実践した。「橋本メソッド」とは、岡山大学教育開発センター教授の橋本勝氏によって開発された、チーム制による本格討論型授業である³⁾。授業を履修している学生を3～4名のチームに分け、あらかじめ設定されているテーマの中から、各チーム自由に2つのテーマを選択する。選択したテーマに関してチームで協働して調査・分析を進め、B4で1枚程度のレジュメ案を期限までに作成して提出する。その中から、橋本氏が2チームを選び、5～10分程度の発表を行うが、それぞれのテーマにおいて、数チームによる競争になるため発表できないチームが発生する。また、発表チーム以外の受講生は支持投票により、発表した2チームの勝敗を決める。発表時間が終わると質疑応答に入るが、平均して25分程度の時間を取る。発表しなかったチームも選択したテーマについては、発表するつもりで予習をして授業に臨んでいるため、鋭い質問が出ることも多い。これらの結果は、成績に直結している。さらに、学生と教員との一対一の関係形成のためにシャトルカード^{※3}を用いる。シャトルカードとは、岡山大学が授業用に開発したミニツツペーパーの一種である。授業の最後に5分程度の時間を取り、学生はコメントを記入し、橋本氏は次の授業まで

に、1つ1つに対してコメントを返すことにしている。この授業方法を橋本メソッドという。

3. 授業の概要

本報告で取り上げる授業は、2010年度後期に徳島大学で金西が担当した共通教育科目「情報メディアと教育」である。この授業は、インターネット上でのメディアを中心に、仕組みや特徴について理解し、特に学習との関わりの中で、現代メディアの位置づけについての理解を目指す授業である。メディアに関して、現代社会に存在する問題を様々な視点から考察する内容であるため、答えのない問題がテーマとなる。さらに、受講生が134名であることから、上述した橋本メソッドの手法を実践することに適していると考えられる。そこで、本授業では橋本メソッドの授業方法をもとにして、ほぼ同様の手順で授業を進めた。異なるところは、シャトルカードの代わりに大福帳を使用し、学生一人一人との関係形成を行ったことである。大福帳とは、1988年に当時、三重大学教育学部教授であった織田揮準氏によって開発された「出席カード」である。毎回授業終了時に学生がその日の授業に関する意見や要望を記入し、教員が回収する。教員は次の授業までに学生のコメントに対する返事を書き込み、次の授業で学生に返却するものである⁴⁾。本授業でも授業終了時に学生が授業の振り返りを行い、大福帳にコメントを記入する時間を5分程度設けた。特に今回は、学生が大福帳に書き込む内容を授業に関する内容に限定せず、私的な内容でもよいことにした。金西は、学生のコメントすべてに対して、50～100字程度のコメントを記入し、次の授業の冒頭で返却した。図1は実際に授業で使用した大福帳である(ただし、学生の氏名、学籍番号、アドレスは削除してある)。

表1は、15回の授業の流れを表している。学生による発表が行われたのは、第4回目から第13回目までの授業で、10のテーマを設定した。表2は、学生による発表を実施した日(4～13回目)の授業1コマの流れを表している。各授業の前半は2チームによる発表と質疑応答を行う。授業の後半は次回の授業で発表するテーマにつ

^{※3} 岡山大学教育開発センターFD委員会が、学生と教員との間の双方向性の授業の確立を目的に開発したカードである。

<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/fd/tc/2009/>
(2010.12.31)

いて、全チームがそれぞれB4用紙1枚にまとめて提出する。ここで、次回の授業で発表を希望するチームはエントリーを行うが、エントリーは10回の中で2回までしかできないこととした。提出されたB4用紙は、発表要旨(図2、ただし学生の氏名は削除してある)となり、金西がエントリーしたチームの発表要旨を見て、発表する2

チームを決定し、授業の当日に選ばれた理由と共に伝える。このため、発表の準備をしても発表できないチームがある。本授業では、1チームあたり4~6名で、全部で28チームであった。表3は、設定したテーマとエントリー数(競合数)を表している。

表1 「情報メディアと教育」の授業の流れ

授業回	主な内容
1	ガイダンス 授業の概要説明、目的の確認 授業の進め方について
2	講義「情報メディア概論1」 仮のチーム分け
3	講義「情報メディア概論2」 チームの確定・授業方法の最終確認 1回目の発表のためのワーク
4~13	各テーマによる発表及び質疑応答 次回の発表のためのワーク
14	期末試験
15	総括授業

表2 学生による発表を実施した日(4~13回目)の授業1コマの流れ

・大福帳の返却(授業開始前)
・大福帳のコメントに対するフィードバック(10分)
・発表できる2チームの選抜結果と選抜した理由の紹介(5分)
・2チームによる発表(各チーム5~10分)
・質疑応答(15~20分)
・次回のテーマについて解説(10分)
・次回のテーマについて発表のエントリーをするチームの決定(5分)
・次回の発表のためのチーム別によるグループワーク(20分)
・大福帳の記入(5分)



図1 実際に使用した大福帳

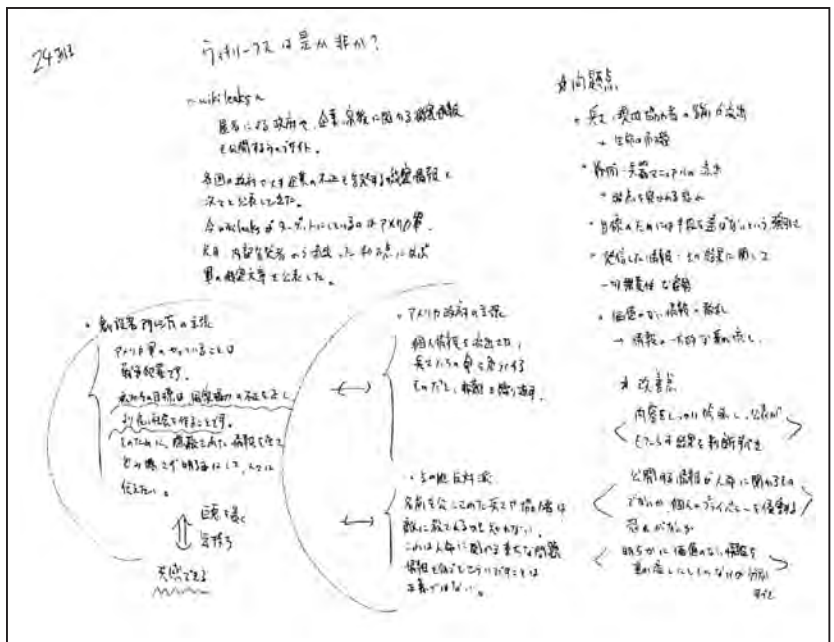


図2 学生が提出した発表要旨

表3 発表テーマ

テーマ	競合数
1. 徳島大学の広報の特徴・改善点は	11
2. メディアのやらせはどこまで許せるか	4
3. ネットはバカと暇人のものか	6
4. ウィキリークスは是か非か	3
5. ソーシャルメディアは私たちの生活にどのような影響を与えるか	4
6. 橋本メソッド (この授業) の改善点は	4
7. Winn y 事件でK氏は有罪か無罪か	4
8. 非実在青年問題について東京都の方針は問題であるか	4
9. クリエイティブコモンズにおける著作権のオープン化は我々の生活に影響するか	10
10. G o o g l e とは何か	5

成績評価方法は、エントリーすると10点、発表すると6~10点^{※4}がチーム全員に与えられる。さらに、受講生は発表と質疑応答を踏まえ、発表した2チームのうち良かった1チームを選び、大福帳に記入することになっている。この投票により勝敗を決め、勝ったチームにはさらに10点がチーム全員に与えられる。また、質疑応答の際に質問すると、その学生に1点が与えられる。期末試験は、学生それぞれ個人で取り組む100点満点の筆記試験で、与えられたテーマについて論述するという内容である。試験のテーマは、「メディアはポピュリズムを打開できるのか」である。これらの点数の合計により成績が付けられるが、合計得点の上限は100点とした。

4. 学生の発表・授業の様子

本授業では、学生による発表を行うため、学生は発表準備として、事前調査、資料収集などの授業外学習を行っている。毎回の授業において発表できるチームは2チームだけであり、発表できることが成績評価の得点につながるため、エントリ

ーしたチームの学生は、自分たちが発表できるようにしっかりした準備を行った。テーマに関する内容について、自身の見解を述べるだけでなく、事例収集や関連する文献の調査などを行い、考察しているチームもあった。発表では、学生の投票によって発表の勝敗を決めるため、内容の充実だけでなく、発表の仕方についても工夫を行っている。パワーポイントのスライドを作成したチーム、模造紙に内容をまとめたチーム、レジュメを用意したチームなど、学生がそれぞれ工夫し、調査、考察した内容をまとめた (図3~5)。さらに、他のチームの発表を聞く場合も、学生同士であるということもあり、自身のチームが準備した内容との比較を行うなど、集中できていた様子である。中には、授業に対する取り組みが変化した学生もいた。例えば、初め授業に対してあまり積極的ではなかったが、回を重ねるごとに、自ら質問するなど、積極的に取り組むようになった。質疑応答の際には、発表の選考に漏れた学生による、考察の仕方や論理の組み立てに関する指摘、理系学生と文系学生の物事を見る視点の違いから生じるやりとりなどが白熱した (図6~7)。また、ある学生は発表に選ばれなかった理由を金西に質問し、その次のテーマから提出する発表要旨のまとめ方が改善された例もある。

一方で、問題点についてもいくつか挙げられる。

^{※4} 通常は発表した2チームの学生全員に10点が与えられるが、エントリーしたチームが2チーム以下の場合には競合が起これないため、その場合のみ、発表したチームの学生にそれぞれ6点が与えられる。



図3 発表の様子



図6 質問をする学生



図4 学生が発表のために作成した模造紙



図7 質疑応答の様子



図5 学生が発表のために作成したレジюме



図8 チーム別のワークの様子

学生の授業への出席率は回を追うごとに低下し、遅刻する学生は増加した。また、発表のエントリーをしていない時は、発表要旨に、数行しか書かれていないチームや、別の科目の学習を行っている学生も数名見られた。その原因の一つには、本授業では、遅刻、欠席の管理を行わず、期末試験は100点満点で行われるため、発表のエントリーなどを行わなくても、単位を取得することが可能

であることが考えられる。その他には、発表の選考を行う基準となる発表要旨は、授業中に仕上げで提出することになっていたため、発表の構成を十分に検討できないまま、発表要旨を提出しなければならないチームがあるように見受けられた。以上の内容については、受講学生自身も感じている点であり、学生の意見の中にも、さまざまな問題点や改善策が挙げられた。

5. 本取り組みに対する学生の声及び分析

本取り組みでは、授業の中間期である第9回目の授業の発表テーマを「橋本メソッド(この授業)の改善点は」とした。これは、本取り組みに対する学生の声を聞くことを目的としている。このテーマに関する発表要旨は26チームが提出しており、本授業に対する率直な意見が挙げられていた。また、発表に対する質疑応答後に10分程度時間を取り、この授業に対する学生自身の取り組み方、授業外学習、授業の改善点などを問う学生アンケート(以下アンケート)を実施し、85名の学生から回答を得た。アンケートは、5件法による選択式の設問と具体的な内容を記述する設問で構成されている。これらのデータから伺える本取り組みに対する学生の声を分析する。

・学生の学習行動、モチベーションへの影響

まずはじめに、本取り組みが学生の授業に対するモチベーションや授業外学習に与えた影響について分析を行う。アンケートでは、「今回の授業方法は、授業への参加や学習に対してモチベーションを上げることに繋がったと思うか？」(5件法)という設問に対して、約6割の学生がとてもそう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答していた(図9)。また、「この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習(調査、発表準備を含む)をよく行ったと思うか？」(5件法)という設問に対しては、約半数の学生がとてもそう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答していた(図10)。表4は、学生が提出した発表要旨にまとめられていた、橋本メソッド(この授業)の良い点に関する内容を、項目ごとに分け、各項目に関するコメント数を表したものである。このデータにおいても、学生が主体的に取り組むことができる・授業へのモチベーションが上がるといった内容が最も多く挙げられていた。このことから、遅刻や欠席などが目立つという課題があるものの、授業に出席している学生にとっては、学習に対するモチベーションを上げることに影響を与えていると考えられる。授業外学習についても、エントリーした時の授業外学習時間(調査、分析、発表準備を含む)を問うアンケートの

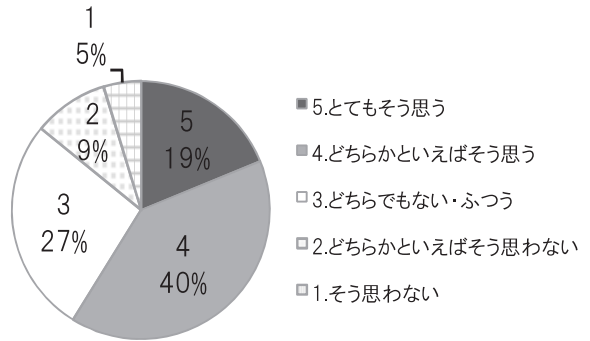


図9 今回の授業方法は、授業への参加や学習に対してモチベーションを上げることに繋がったと思う

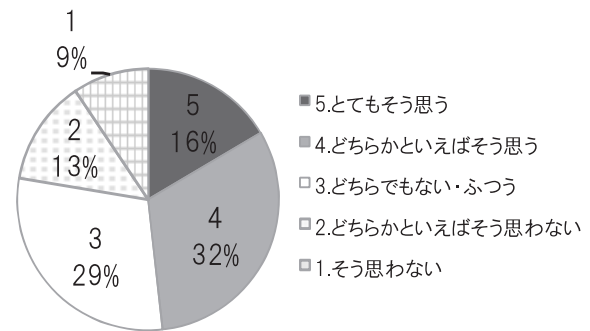


図10 この授業では、他の授業に比べて、授業以外での学習(調査、発表準備を含む)をよく行ったと思う

表4 発表要旨に挙げられていた橋本メソッド(この授業)の良い点

項目	件数
1. 学生が主体的に取り組むことができる・モチベーションが上がる	10
2. 楽しい、授業の雰囲気が良い	6
3. チームで課題に取り組むことができる	5
4. 文章スキル・プレゼンスキルが身につく	4
5. 成績の付け方が分かりやすい	3
6. その他	7

注) 提出された26チームの発表要旨の中に記載されていたこの授業の良い点である。件数は、各項目に関する良い点を指摘していたチーム数を表している。

設問に対する回答から、平均して約3時間の学習を行っていたことがわかる(表5)。実際には、このデータに関しても大きなばらつきがあり、0分や30分と回答した学生が数名いる中で、8時間と回答した学生も5名いることが分かる。このように、約半数程度の学生にとっては、学生主体であること、学生自身が考察した成果を発表する機会があり、評価されることが、学生の学習意欲を高め、自主的な学習行動につながっていると考えられる。

表5 エントリーを行った時の
授業外学習時間の分布

学習時間	人数(人)
0分	4
30分	2
1時間、または1時間30分	17
2時間、または2時間30分	12
3時間	12
4時間	9
5時間	7
6時間	4
8時間	5

注) アンケートを提出した85名の中で、エントリーした経験がある学生は76名で、このうち、学習時間の回答が得られた72名のデータを表している。平均学習時間は、3時間2分である。

・学生が身に付けた知識、スキル

次に、本取り組みによって学生が身につけることができた知識、スキルについて分析を行う。表6は、この授業で学生が身についたと思う知識やスキルを、記述形式で問うアンケートの設問に対する学生の記述を項目ごとに分け、多く挙げられた上位5項目を表したものである。最も多く挙げられていたのが、人に意見を伝える力、発表の仕方やレジュメの作成方法などのプレゼンテーション能力である。これらの力は、大学初年次段階で身につけておきたい、スタディスキルと呼ばれる能力である。次いで、協調性、他の人と協力して1つのものを作り上げる力などのチームワー

ク力が挙げられていた。これらの能力は、「学士力」^{※5}や「社会人基礎力」^{※6}に挙げられている能力のうちの一つである。授業の目的である、現代のメディアに関する知識や役割に関する理解も、上位に挙げられていた。その他に、「他人の意見を聞いて、発表(質問)できるようにする」「他人の意見をふまえた考えを持てるようになった」といった記述に見られる傾聴力、「自分から調べるクセがついた」「積極的な行動が以前よりできるようになった」といった記述に見られる積極性が身についたことがわかる。本取り組みでは、授業の目的として掲げられた内容に関する理解の他、大学初年次で身につけておきたいスタディスキルや、社会生活でも必要とされる汎用的な能力についても身につけることができたと考えられる。

表6 アンケートの記述に挙げられていた
この授業で学生が身につけることが
できたと思う知識やスキル上位5項目

項目	件数
1. プレゼンテーション能力	17
2. チームワーク力	16
3. メディアリテラシー及び現代のメディアに関する知識	14
4. 傾聴力	12
5. 積極性	11

注) アンケートを提出した85名の中で、この授業で身についた知識やスキルについての回答が得られた学生数は60名であった。このうち複数の項目に対する回答をした学生が16名である。

※5 学士力とは、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」²⁾の中で提唱された、学士課程共通の学習成果に関する参考指針として、各専攻分野を通じて培う能力のことである。

※6 社会人基礎力とは、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として、経済産業省が提唱した能力である。

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
(2010.12.31)

ここまでの学生の声を整理し分析すると、学生が学習すべき内容や量を、教員が具体的に指定することなく自由にする代わりに、学生を競争させる仕組みを作ることで、学生の授業に対するモチベーションの向上や授業外学習を促進していることが分かる。その結果、学生の自主性や積極性が養われ、授業内容に対する理解にもつながった。さらに、チームによる課題解決型の授業にすることでチームワーク力、学生による発表形式を取り入れることで、プレゼンテーション力や傾聴力がそれぞれ身についたと考えられる。その他に、「分析力」「物事を深く考える力が身についた」「とても良い経験ができています」といった回答がある。ただし、この設問に対し、25名の学生が無回答であることから、このような結果も受講生のうち半数程度に留まっていると推察される。

・本取り組みの課題

一方で、本取り組みに対する課題も多く挙げられている。アンケートにおいて、「今回の授業方法には、まだまだ改善すべき点や課題があると思うか？」(5件法)という設問では、7割の学生が、そう思う、またはどちらかといえばそう思うと回答していた(図11)。表7は、改善点に関する具体的な記述を項目ごとに分け、多く挙げられた上位5項目を表したものである。また、表8は、学生が提出した発表要旨にまとめられていた、この授業の改善点に関する内容を項目ごとに分け、各項目に関するコメント数の上位10項目を表したものである。これらのデータに共通して最も多く挙げられていたのが、遅刻、欠席者の管理を行うべきという改善点である。本授業では、遅刻者、欠席者の管理は特に行っていない。これについては、筆者、金西共に気にしていることではあるが、授業への参加は学生自身の自主性に任せることにしていた。しかし、まじめに取り組んでいる学生から、「授業の途中で教室に入って来ことでモチベーションが下がってしまう」「遅刻する人に集中力を下げられる」といった意見が挙げられていることから、何らかの対策を取る必要があると考えている。今後、学生の記述や発表の中で挙げられた改善策を踏まえ、遅刻、欠席する学生が、

出席している学生のモチベーションを下げることにならないように対策を検討することが大切であると考えている。

次いで、アンケートにおいて多く挙げられていた改善点は、チームの作り方、人数に関する内容である。その理由として、チーム内での人間関係の問題や、学部、キャンパスが異なるため、コミュニケーションがうまくとれず、チームワークが十分でないといった内容が記述されていた。キャンパス、学部が異なるという問題点は考慮の必要があると考えられるが、チーム内でのコミュニケーションの問題については、アンケート及び発表要旨に、別の項目で挙げられていた、チーム内のモチベーションの差に対する評価をすべきという内容に関係している。それは、チーム内でのメンバー間のコミュニケーションやモチベーションの差を、教員がコントロールすべき内容であるか否かは、賛否が分かれるのではないかということである。実際に、授業中の質疑応答の際にも、この点は議論になった。あらかじめチーム内のモチベーションの差やコミュニケーションに問題が起きないように、配慮してチーム編成を行うべきか、それとも、このような問題も含め、チームで解決する努力を行うべきかということである。この日の授業に出席していた学生に、挙手をする事でこのことを問うた結果によると、後者の考えを持つ学生の方が多かった。この点に関しては、授業の目的を踏まえて検討すべき内容である。

次に発表要旨において多く挙げられていた改善点は、発表チームの選抜基準の明確化である。具体的な改善策として「先生が判断した理由を明

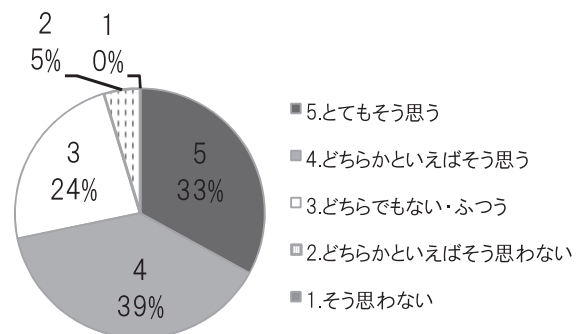


図11 今回の授業方法には、まだまだ改善すべき点や課題があると思う

表7 アンケートの記述に挙げられていたこの授業の改善点上位5項目

項目	件数
1. 遅刻、欠席者の管理を行うべき	17
2. チームについて (作り方、人数、席の固定化など)	6
3. 大福帳について (コメント欄の大きさなど)	5
4. チーム内のモチベーションの差に対する評価をすべき	3
4. 発表できなかったチームの評価をすべき	3

表8 発表要旨に挙げられていたこの授業の改善点上位10項目

項目	件数
1. 遅刻、欠席者の管理を行うべき	9
2. 発表チーム選抜基準の明確化	8
3. チーム内のモチベーションの差に対する評価をすべき	7
4. 楽しようと思えば、楽できる点	6
4. 発表できなかったチームへの評価をすべき	6
6. 発表のエントリーをしないチームの意欲を向上させることについて	5
7. 2チームの発表において、大福帳に記載された学生の投票に関するコメントをフィードバックすること	4
7. 発表要旨を作成する時間の拡大	4
9. 質疑応答の際に質問が出やすい雰囲気を作ること	3
9. 評価の得点配分について	3
9. 発表テーマの設定の仕方、発表テーマの提示のタイミングについて	3

注) 提出された26チームの発表要旨の中に記載されていたこの授業の改善点である。件数は、各項目に関する改善点を指摘していたチーム数を表している。

確に述べる」などの提案がされており、選抜理由は学生に伝えていたが、このような意見が挙げられたことによって、学生には十分に伝わっていなかったことが分かる。これは、すぐに取り組める内容であるため、第10回目の授業から、金西は意識して発表チームの選抜理由を明確に述べることにした。本取り組みでは、発表チームの選抜を金西の基準で行っているが、今後は明確な基準をあらかじめ示しておくべきかどうか、検討する余地があると考え。その理由として、上述したように、選抜から外れた理由を聞きに来た学生の取り組みが、その後変化したように、理由の明確化は学生のモチベーションにも影響を与えると考えられるからである。

その他にも、さまざまな改善点が挙げられた。これらの意見の中には、学生に求めたい能力や授業の目的などを考慮すると、改善すべきではないと判断できるものも存在するが、改善の必要があり、すぐに取り組むことができる内容も含まれている。例えば、発表要旨を作成する時間の拡大などは、学生の授業外学習の促進や、より深い調査、考察を促すためにも有効である。発表要旨を授業中に提出しなければならないという必要性は特にない。そのため、学生に説明し第10回目の授業からは、発表要旨の提出期限を授業が行われた週の金曜日午後5時とした(本授業は火曜日に実施されている)。その結果、提出された発表要旨にはすぐに変化が見られ、明らかに分かることと

して、多くのチームにおいて内容量が増加した。テーマに関する内容をより詳しく調べ、細かい内容まで記載されるようになった。さらに、考察に時間をかけ、内容が深まっているチームや、見やすいようにデザインに工夫を凝らしているチームもあった。このように中間期に学生の意見を収集することで、すぐに対応できる箇所を改善することができた。また根本的な問題も含め、今後の双方向型授業の展開にとって有益となる多くの検討課題を、明らかにすることができた。

6. まとめ

今回、「橋本メソッド」の授業方法を参考にして大人数講義で双方向型授業を実施したが、学生の積極性、主体性を身につけることやチームワーク力といった、学士力、社会人基礎力に挙げられている社会生活でも必要となる汎用的な能力を養成することに一定の効果があったと考えられる。また、授業外学習を促すことについても効果があることがわかった。さらに、本来の授業の目的である、現代メディアに関する知識の習得や理解についても効果が見られた。しかし、授業に関する改善点もいくつか見えてきた。上述したような効果は、まじめに取り組んだ学生にのみ見られることで、受講者のうち半数程度に留まっているものと考えられる。また、エントリーしなかった時の授業外学習時間は、エントリーした時に比べ、かなり少ないと推察できる。今回挙げられた改善点を踏まえ、さらなる授業実践を行い、その実践が学生の学びにどのような影響をもたらすことができたのか、継続して調査していく必要がある。このように学生主体の授業実践を行う教員が増え、学内外において教員同士の自主的な情報交換が行われるようになれば、高等教育が抱える問題解決への糸口になるのではないかと。

参考文献

- 1) 溝上慎一：アクティブ・ラーニング導入の実践的課題，名古屋高等教育研究，7，269-287，2007.
- 2) 文部科学省：中央教育審議会答申「学士課程の構築に向けて」，2008.
- 3) 清水亮，橋本勝，松本美奈：学生と考える大学

- 教育，ナカニシヤ出版，2009.
- 4) 織田揮準：大福帳による授業改善の試み，三重大学教育学部研究紀要，第42巻，165-174，1991.